

金沢21世紀美術館が所蔵するグレイソン・ペリーの作品《敏感な子供の苦境》(2003年、Fig. 1、2)は、高さ約100cmの古典的なフォルムの壺の全面に様々なイメージが描かれた作品である。一見すると、少女たちが遊ぶ図に花などの文様が重なり合い、楽しげな雰囲気を持つ。しかしよく見ると、武器を手に持ち、薬物を吸煙する少女たちや、血がついた服を着た子供、路上に停められた歪んだ自動車、事故の現場のように花束が供えられた街灯などが描かれていることに気がつく。整った壺の形体とカラフルで装飾性豊かな構成の中に込められたのは、現代の社会問題の提起や風刺だけではない。我々の感覚や認識を揺さぶり、価値判断の拠り所を疑わせるような、イメージの連鎖反応を導く装置も提示されているのだ。

グレイソン・ペリー(1960-)は、ポーツマス・ポリテクニク美術学科を卒業後、活動初期の1980年代前半は、主にフィルム制作やパフォーマンス活動を行っていたが、80年代半ばに、陶芸のコースを受講したことをきっかけに、陶芸を主に手がけるようになる。ペリーの陶芸作品の大きな特徴は、ギリシャや中国、日本などの古典的な壺から引用したフォルムに描いた様々な現代的な主題——暴力、偏見、性的抑圧や大衆文化、信仰——に加え、自分で撮った写真や雑誌等から引用したイメージ、大量生産の陶器用の装飾文様などを、折り重ねるように壺の表面に転写することで生まれる視覚的重層性にある。陶芸の他にも、彫刻、写真、版画、キルトやドレスのデザインなど幅広いジャンルにわたって制作を行うが、本稿では特に《敏感な子供の苦境》において際立ついくつかの要素を取り出し、ペリーの表現世界を巡る手がかりのひとつとしたい。

## 少女たちの多義性

ペリーはこれまでも自身の作品の中でしばしば少

年少女たちを描き表してきた。多くの場合は、無邪気に遊んでいるかのように見える子供たちの背景に、燃え上がる家や、武器に戦闘機、棺桶などを描き、暴力や虐待、死を暗喩するような、子供の生活環境のダークサイドを表出させてきた。しかし《敏感な子供の苦境》では、描かれた10歳前後の子どもたち自身にそういったダークサイドのイメージを背負わせるという手法がとられている。

舞台は、ある郊外の街角の空き地、もしくは道端、あるいは橋の上で、そこに10人ほどの少女たちが描かれた。壁の落書きの付近に集まる集団にまず目を向けると、少女らがナイフにピストル、棒や斧を、おもちゃでも扱うかのようにかざしている(Fig. 3)。遠景には、フロントガラスが割られた自動車の脇で、一人の少女がさらに石を投げつけんばかりのポーズをとる。この場面の反対側には、薬物を吸引する少女たちと、金槌を後ろ手に隠した少女のグループがいる(Fig. 4)。その右方には、他の子どもたち同様に髪にリボンをつけパフスリーブのブラウスを着た子どもが立っているが、下半身を露出していることから、その子供が少年であることに気がつく(Fig. 5)。少年の視線の先をたどると、すぐ隣にそびえ立つ街灯の支柱に花束やぬいぐるみなどと一緒にくり付けられた、女装したペリー自身の顔写真に行き着く。ひとつの悪夢のようなイメージの連なりの中に、いきなりクリア(ペリーの女装時の名前)としてのペリーの姿が見る者の目に飛び込むのだ。写真の中のクリアは、急に現実に戻された我々の方を、じっと見つめている。

通常、街灯や電柱に花やぬいぐるみ、写真が供えられていたら、交通事故などの悲劇の現場として我々は認識するであろう。しかし、本作品の世界においては、見る者の感傷を誘うには異質な空気に満ちている。ペリー自身の投影とも考えられる、指をくわえながら下半身をさらす少年の姿や、街灯の背後の柵にくり付けられた花束に添えられたメッ

セージ「私たちの小さな悪魔へ」(「小さな天使」ではない)を見ると、覚めない悪夢の中にいるかのような気分になる。

《敏感な子供の苦境》の中で子ども達が繰り広げる風景は、とある郊外の町でおきているかもしれない少年少女たちの不良行為といった、現実の社会問題の描写や単純な批判でない。そうではなく、我々の固定観念への揺さぶりが構造として内包されている点に注目すべきである。まず、提示されるのが、武器や薬物などのアイテムの付加による「少女」という概念から連想される「かわいらしさ」「純粋さ」「あどけなさ」などの属性の裏切り。また、事故か自殺かを連想させる現場の情景が観者に喚起するある種の感情と、その脇で始まろうとしている幼い子どもらによる暴力とが同じ舞台の中で語られるということに対する違和感。さらに、少女のような装いをしつつも、むき出しとなった下半身によってそれが少年だと気が付いた時に見る者が受ける複雑な感情。暴力や問題の原因となる「悪者」(例えば大人など)が登場するのではなく、幼い子供らが当事者であることからくる感覚の揺らぎ。そもそも、このような古典的なフォルムの壺において、こういったモチーフが描かれることを通常人は想定しないのにも関わらず、実際に描かれているという、大きな前提崩れが行われているのだ。

ペリーは本作品を制作するにあたっての一つのインスピレーション・ソースとして、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した画家、ジョン・シンガー・サージェントによる《エドワード・D・ボイトの娘たち》(1882年)(Fig. 6)をあげた。<sup>1</sup> サージェントは19世紀後半の上流階級の生活や社交の場を描いた作品で知られるが、本絵画では彼の画家友達でもあったボイトの4人の娘たちを描いている。この絵画は、白いエプロンドレスを着た4人の少女たちを彼女らの家で捉えたものだが、友人の幼い娘たちを描写した絵にしては、表情や互いの位置関係に微妙な距

# 作品論考: グレイソン・ペリーの《敏感な子供の苦境》

吉岡恵美子

離感を感じさせる。特に後ろの二人の陰に沈むような描かれ方、画面の余白の残し方などは、どこことなく親密さに欠け、冷めた雰囲気醸し出している。この絵を見たことがペリーを《敏感な子供の苦境》の制作に向かわせたとしたら、それは、無垢であるはずの少女たちが持つ複雑で時には屈折した内面や、彼女らを取り囲む環境に潜む何らかの暗部を直感的に感じ取ったからではないだろうか。我々の日常と隣り合わせの抑圧や暴力の滲みをあらゆるスタイルで浮かび上がらせてきたペリーの視点をここでも認めることができる。

サージェントがこの肖像画を描いた当時、ボイト家の娘たちは、4歳から14歳であった。《敏感な子供の苦境》でペリーが描いた子供たちも恐らく10歳くらいであろう。この作品について言及したコメントの中でペリーは、「私たちがよく、子どものことを純粹でセンチメンタルな見方で捉えたり、またその反対に子どもの残忍さを強調したりすることについて考えていました。でも真実は、そのどちらでもなく、その間にあるものです。」<sup>2</sup>と表現した。幼年期と思春期の境界線に位置するような微妙な年齢の少女たちを題材にしたことを考えると、この作品の制作当時、ペリーの娘もちょうど10歳であったのは偶然ではないかもしれない。

## 日常と野蠻の同居のメタファー： 郊外

本作品の背景部分に目を転じてみると、そこには、うらぶれた郊外の町並みが丹念に描き込まれている（Fig. 7）。密集した家々やアパート、ゴミ集積箱が転々と置かれた通り、張り渡された電線の連なりや、フロントガラスが割られた自動車が停められた道端。町並みの奥の方には煙を吐き出す工場の煙突があり、ハイウェイを挟んで反対側の敷地には、キャンピングカーやトラックが停められ、そこで生活が繰り広

げられているのか、ロープに洗濯物が干されている敷地が見える。壁には卑猥な落書きがあり、橋の上の街灯は事故か自殺の現場を匂わしている。

どこにでもありそうで、どこでもない無名の場所としての郊外風景は、たびたびペリーの作品で扱われてきた。それらは、作家が暮らしたエセックス州のいくつかの町の風景や、現在作家がスタジオを構えるロンドン郊外の地域などのイメージが基となり、彼のファンタジーによって味付けされた想像上の風景だと考えられる。《敏感な子供の苦境》に関して作家は、自身のスタジオがある地域、ワルサムストウからインスピレーションを受けて描いたと具体的に述べている。「《敏感な子供の苦境》は、ある日、アイデアがわからず何となく感傷的な心持ちでいたため、散歩に出かけたときに思い浮かんだ作品です。私のスタジオはワルサムストウにあり、私はそこの北環状線沿いを歩いていました。そしたらひどい落書きを目にしたのです。それを見て、私のスタジオが実際にあるこの地域へのオマージュの意味で、この壺を作ることの思いつきました。」<sup>3</sup>

このエピソードのとおり、ペリーはこの壺の少女達が遊んでいる（争っている）脇の壁に、卑猥な落書きを書き入れている。手前の地面にコンドームが投げ捨てられている様子も、殺風景な郊外の雰囲気を高めている。ワルサムストウを含めて郊外の町がどこもここで描かれたように荒れ、殺伐とした雰囲気に満ちているわけでない。実際は、平凡で平和な、どこにでもある日常が広がっていることしか、表面的には映らないかもしれない。ペリーがここで表現しているのは、一見して何事も起きていないかのような郊外の町やそこに住む人々の暮らしの中にも、例えば家庭内暴力やいじめ、アルコール依存、社会格差の現実や、様々なレベルでの差別や偏見などが存在する可能性があるというメッセージであるように思われる。

日常と共存するこのような暗部を象徴的に表しているのは、壺の下から上まで器体を縦断するように

描かれた、枯れかけた木と折れ垂んだ街灯の姿である。前者は、松のように曲がりくねりながら伸びているが、落雷でも受けたかのように枝が無惨にも折られた上に、幹の最上部には自転車の車輪らしき物体が1本引っかけられた（Fig. 8）。街灯は前述のごとく、悲劇の現場の象徴である。木と街灯という、自然と人工の両方の存在から連想される暴力の影が、本作品で描かれた子供の無邪気さの中の冷淡さ、及び郊外の日常における野蠻や不安と連動しているように見えてくる。

## 重ねられた画面：コラージュ

《敏感な子どもの苦境》のみならず、ペリーの多くの作品には、そこで描かれている題材とは関係ない（もしくは一見して無関係に見えるが実はリンクする）別のイメージ群がコラージュ的に重ねられる。それらは例えば、ペリー自身が撮影した風景や自画像、雑誌や絵本などからコピーしたイメージ、聖母子像などのアイコンの断片である。コンテキストの外からイメージの断片を持ち込むことで、意味や印象の異化が成されることは、ダダイストらを含め、コラージュを採用した多くのアーティストらが示してきたことである。ペリー自身も活動初期からコラージュの手法を取り入れた作品を多く作っていたが、陶芸を手がけだしてから、本作品を含めて多くの作品にコラージュの手法を採用している。

《敏感な子供の苦境》は、もともとの画面に対して、重ねられるイメージの割合がペリーの他の作品と比べて多い。見る角度によっては、表面の8割方が外部から取り込まれたイメージで埋められている。本作品では、壁紙のような花柄の装飾文様、壊れた車の写真、聖母子像や少女の写真などが本来のソースから切り取られ、器体表面に貼り付けられているのだが、コラージュ部分の配置方法に注目してみると、画面の中で浮き雲のようにランダムに配置

された面と、長方形のイメージが互いに繋ぎ合されて間隔をおかず配置された面の2種類があることに気がつく。前者はペリーの他の作品でもよく見られるレイヤーの施し方であるが、後者に関しては本作品に特徴的な要素である(Fig. 9)。

このことに関連して興味深いのは、ペリーがこのコラージュ部分に関して、ジグマール・ボルケのティータオルを使った作品にインスピレーションを受けたと言及したことだ。<sup>4</sup> おそらく、ボルケが1994年に制作し《ハンドタオル》(Fig. 10)と名付けた作品のことだと思われるが、何種類もの市販のキッチンタオルをそのまま繋ぎあわせてできたレディメイドに近い作品である。配置されたタオルの中で1点だけ、アルブレヒト・デューラーが描いたウサギの絵画を、ボルケがタオルの図柄として紛れ込ませている。日常の消費物と美術史から引用されたイメージとが並列に並べられているのだ。

《敏感な子供の苦境》の長方形のコラージュ部分においても、壁紙やティータオル等のモチーフの合間に紛れ込むかのように、壊れた自動車の写真や、郊外の街角の風景写真が挿入された。コラージュの内部で既に異化作用が生じている状態のまま、ペリーは、自身のドローイングで埋め尽くされた壺の画面に重ね合わせていく。それによって、更なる意味と視覚性の多層化をこの作品に施そうとしていると思われる。

## 壺のフォルムの意味

ペリーの壺の作品は、多くがギリシャ、中国、日本などの古典的な壺のフォルムを引用していると述べた。作家は自分のスタジオに各国・各時代の陶器の図録を多く所蔵し、作品の構想を練る際に、実際に粘土を立ち上げて成形していく際に、それらの図版を参照する制作スタイルをとる。器を手がける現代陶芸家の多くがそのフォルム自体に個性的

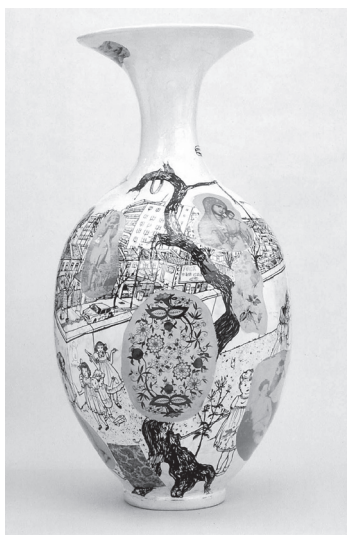


Fig. 1

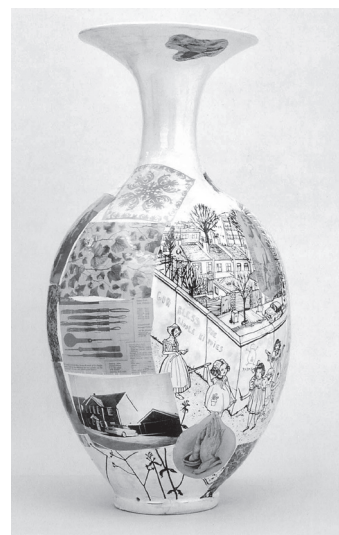


Fig. 2



Fig. 3



Fig. 4



Fig. 5



Fig. 6



Fig. 7

Fig. 1, 2 グレイソン・ペリー 《敏感な子供の苦境》、2003年、陶、H101×54cm、金沢21世紀美術館蔵, Courtesy: Artist / Victoria Miro Gallery

Grayson Perry, *Plight of the Sensitive Child*, 2003, Glazed Ceramic, H101×54cm, Collection of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

Fig. 3, 4, 5 《敏感な子供の苦境》部分 *Plight of the Sensitive Child* (detail)

Fig. 6 ジョン・シンガー・サージेंट 《エドワード・D・ボイトの娘たち》1882年、221.9×222.6cm、ボストン美術館蔵

John Singer Sargent, *Daughters of Edward D. Boit*, 1882, 221.9×222.6cm, Collection of Museum of Fine Arts, Boston

Fig. 7 《敏感な子供の苦境》部分

*Plight of the Sensitive Child* (detail)

な表現の発露や独自性を模索するのとは異なり、ペリーは壺のフォルムに独自性を求めない。それは、あくまでもペリーにとって、人々が「壺」と言われてイメージするかたちを、自身の作品が纏うことを望むからだ。ペリーは以前、筆者によるインタビューの中で次のように語った。

「私は、最も原型的なもの、最も古典的なものを参照します。奇妙な形の壺を作りたくはありません。古典的な壺のフォルムをコピーすることは、絵画にとっての額縁の關係に似ています。額縁を目立たないようにしたいのです。そうすると、見る人は壺の形ではなく、そこに繰り広げられるイメージに注目するでしょう。」<sup>5</sup>

《敏感な子供の苦境》の場合、なで肩のゆるやかにふくらんだ胴、細く締まった首、水平に大きく開かれた口縁部を持つフォルムは、特定の地域や時代の特徴を超えたある種、原型的なフォルムと言った方が正しいかもしれない。実際には、本作品のフォルムに関するペリーの参照元は、サージェント作の《エドワード・ボイトの娘たち》で、奥にいる少女が寄りかかっている壺と、その対として画面右端に描かれたもう一つの壺である<sup>6</sup>。少女の背よりも高い一對の染付の壺は、ペリーの《敏感な子供の苦境》と比べれば胴のふくらみも、口縁部の外へ向けての広がりも多少押さえられ、すっきりとしたヴォリュームで垂直方向へ立ち上がっている。この壺は、エドワード・ボイトが所有していたものだが、後に絵と同じくボストン美術館へ寄贈され、それが描かれた絵の脇に展示された。ボストン美術館の当該作品情報によると、これらは江戸末期から明治初期に作られた高さ188cmの有田焼の壺である。ペリーの作品は高さが101cm、直径54cmと、作家が通常手がける陶作品の中でもかなり大作の部類に入るが、そのスケールもこの絵画の中の壺に刺激されたのかもしれない。

ペリーが、ボストン美術館でサージェントの絵画と

壺の実物を見たのか、画集等で見ただけなのかは確認できていない。画集などから壺のフォルムを参照するペリーの習慣を考えれば、後者であるかもしれない。どちらであっても興味深いのは、ある絵画で描かれた少女たちと背景の壺という関係が、ペリーの作品の中では、壺とその中に描かれた少女たちというような関係に変換されていること、かつサージェントの絵画の醸し出す雰囲気や性質を鋭く感じ取り、自身の作品の中でさらに大胆かつ巧妙な方法で展開していることである。

本稿で当館が所蔵する《敏感な子供の苦境》について、作家の言葉を辿りつついくつかの分析を試みてきた。物事の白黒を知ることではなく、白でも黒でもないグレーがあることを理解することの方が重要だと作家が繰り返すように<sup>7</sup>、本作品は、ひとつの単純な道徳的教訓や彼の世界観の回答を呈示するものではない。ここで繰り広げられる子供たちの世界は、画面に取り込まれた様々なイメージの断片と連関しながら、また見る者の心理や意識ともかわりつつ、最終的には「人間性とは何か」という問いを我々にぶつけていると思えてくる。本作品は、壺でありながら武器であり、装飾的でありながら攻撃的である。幻想でありながらひとつの現実でもあり、それはまた我々自身の現実にもなりうるのだ。

(よしおか・えみこ／キュレーター)

- 1 2004年の本作品購入時に、作家より提出されたステイトメントより。同絵画は現在、ボストン美術館が所蔵する。
- 2 同上
- 3 “Grayson Perry: Collection Intervention”, Tate St. Ives, 2004
- 4 2004年の本作品購入時に、作家より提出されたステイトメントより
- 5 2006年11月にロンドンの作家スタジオで収録したインタビューより
- 6 2004年の本作品購入時に、作家より提出されたステイトメントより
- 7 2006年11月にロンドンの作家スタジオで収録したインタビューなど



Fig. 8



Fig. 9

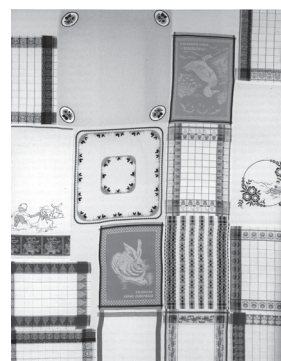


Fig. 10

Fig. 8 《敏感な子供の苦境》部分

*Plight of the Sensitive Child* (detail)

Fig. 9 《敏感な子供の苦境》部分

*Plight of the Sensitive Child* (detail)

Fig. 10 ジグマール・ポルケ《ハンドタオル》、1994年、布、300×250cm、個人蔵

Sigmar Polke, *Hand Towels*, 1994, Textile, 300×250cm,

Private Collection

Grayson Perry's *Plight of the Sensitive Child* (2003, Fig. 1, 2) owned by 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa is a work of a nearly 100cm-high pot in classic form, on which various images are drawn all over. On first viewing, the work has a pleasant atmosphere with figures of playing girls overlapped with patterns such as flowers. Looking at it closely, however, we find the girls sucking drug with weapons in their hands, a child wearing bloodstained clothes, damaged cars on the road, and a streetlight at which a bouquet of flowers are offered as if it were a spot of accident. What is put into the composition with a neatly shaped pot and colorful decoration is not only the presentation or satire of today's social issues, but also it indicates a device that triggers a chain reaction of images so that our senses and awareness are shaken and the basis for our value judgments becomes doubtful.

After graduating from Portsmouth Polytechnic, Grayson Perry(1960–) was mostly engaged in film production and performance activities in his early years in the first half of the 1980s. He began to make ceramic works after attending a course on ceramics in the middle of the 1980s. The special feature of Perry's ceramic works is its visual multi-layered quality, which is made possible by copying images from the photos that he took or magazines as well as decorative patterns commonly used for the mass-produced earthenware on the surface of a pot to make them look lying on top of

one another, in addition to depicting various contemporary subjects, such as violence, prejudice, sexual suppression, popular culture, and religious faith, on the forms borrowed from Greek, Chinese, or Japanese classic pots. Besides ceramics, he makes works using a variety of media—sculpture, photos, prints, quilts, and dress design—exceeding specific genres. In this text, however, I take out some prominent elements of *Plight of the Sensitive Child* in particular, to find a clue to Perry's world of expression.

### Multiple meanings of girls

Perry has often depicted boys and girls in his works. In many cases, flaming-up houses, weapons, fighter planes, and coffins are drawn against a background of children playing innocently. Thus, the dark side of children's surroundings was expressed as metaphors for violence, abuse, and death. In *Plight of the Sensitive Child*, however, the artist employs a style in which about ten-year-old children themselves are saddled with the image of such a dark side.

The scene is a vacant plot of land on a street corner in the suburbs, by the roadside, or on a bridge, and depicted there are about ten girls. First directing our attention to a group of children gathering around the graffiti drawn on the walls, we see that the girls are handling knives, pistols, sticks, and hatchets just like toys. (Fig. 3) In the background, a girl poses as if she were about to throw a stone beside a car that already has a broken

windshield. On the opposite side of the place are two girls sucking drugs, and a girl hiding a hammer behind her back. (Fig. 4) On the right-hand side is a child who is standing in a puff-sleeved blouse and with ribbons on her hair. As the child is naked from the hip down, it is noticeable that it is actually a boy. (Fig. 5) Following the boy's eyes, we reach a photo of Grayson Perry's face, who disguises himself as a woman and is tied to a streetlight pole next to the boy, together with bunches of flowers and a stuffed animal. In a range of the same nightmarish images, Perry's appearance as Clair (his name as a transvestite) jumps into our eyes. Clair in the photo looks at us fixedly as we are pulled back to reality.

Generally speaking, when we see flowers, stuffed animals, and photos offered at the foot of a streetlight or electric pole, we assume that it is a spot of tragedy such as a traffic accident. The scene in this work, however, is filled with atmosphere that is too extraordinary for viewers to feel sentimental. When we see a boy who exposes his lower half of the body while holding his finger in his mouth, that is probably Perry's own reflection, and a message "OUR LITTLE DEVIL" (not "our little angel") attached to the bouquet, which is fixed to a fence behind the streetlight, we feel that we have a nightmare that we will not wake from.

The scene unfolded by children in *Plight of the Sensitive Child* does not describe such real social issues as minor crimes

## A Study on *Plight of the Sensitive Child* by Grayson PERRY

YOSHIOKA Emiko

Curator

committed by juvenile delinquents that might be happening in a certain town in the suburbs or it is not simple criticism. On the contrary, we should note that it structurally involves the point to shake our stereotypes. It goes against such attributes of "girls" as "cute," "innocent," or "pure," and instead, the betrayal is expressed in things like weapons, drugs, and girls' acts involved there. We also feel that there is incompatibility between a kind of sentiments aroused by the scene of a site suggestive of an accident or suicide, and violence by children that is about to start at the side, both of which are expressed on the same stage. What is more, complex feelings we have when we notice that one who is dressed like a girl is actually a boy with his naked hip, confuses viewer's interpretation. "Bad fellows" who commit violence or crimes (for instance, adults) do not appear, but little children are involved. That wavers our senses. Usually nobody imagines in the first place that such a motif would be depicted on a pot that has a very classic form. Nevertheless, it has actually been done to damage premises.

As one of his inspiration sources for producing this work, Perry named *Daughters of Edward D. Boit* (1882, Fig. 6) by John Singer Sargent, a painter who was active from the latter half of the 19th century to the beginning of the 20th century.<sup>1</sup> In this painting, Sargent, who is known by the works that describe the life of the upper class and fashionable circles in the latter half of the 19th century, depicts four daughters of Boit,

one of his artist friends. While describing four girls wearing apron dresses at home, this painting makes us feel a slight distance in their looks and positions to each other for a painting describing a friend's little daughters. Two girls behind in particular are described as if they were sinking into the shade, and there is some blank left in the painting. Because of those, the painting lacks intimacy somehow, and cold atmosphere is created. If this picture provided Perry with a chance to lead him to express *Plight of the Sensitive Child*, it was probably because he felt intuitively that girls, who are usually thought pure and innocent, have a complex and, at times, warped mind, and some shady parts that lurk in the environment surrounding them. Perry's viewpoint, which has made blots of suppression and violence next to our daily life surface in all different styles, can be recognized here.

At the time when Sargent painted this portrait, the Boits' girls were from four to fourteen years old. Children in *Plight of the Sensitive Child* are also around ten. In the comment concerning this work, Perry says, "I was thinking about how we often view children in a pure and sentimental way or as young thugs and that the truth is somewhere in between."<sup>2</sup> When considering that girls who are at a difficult age bracket between childhood and adolescent are used as a theme, we think that it is perhaps no accident that Perry's daughter was ten years old at the time of the production of this work.

## Metaphor for both the ordinary and barbarity: the suburbs

When we turn our eyes to the background part of this work, we find that shabby town streets in the suburbs are carefully painted. (Fig.7) There is a street scattered with garbage bins, a range of stretched electric wires, and a roadside where there is a car with its windshield broken. In the inner part of the street is a factory chimney emitting smoke, and in a site across the highway are a camping car and a truck, and some people seem to live there as laundry is dried on a rope. There are obscene graffiti on the wall, and a streetlight on the bridge suggests a spot of an accident or suicide.

This kind of suburban scenery that is unknown and could be anywhere or nowhere has often been depicted in Perry's works. The scenery is thought to be that in his imagination with his fantastical flavor, based on the images of some towns in Essex where the artist used to live, and the area in the suburbs of London where he currently has his studio. As for *Plight of the Sensitive Child*, the artist states that he made the work with inspiration he got from the district of Walthamstow where he has his studio. Perry explained the background as follows.

"*Plight of the Sensitive Child* (was) made when I was on one of those romantic moments without inspiration so I went for a walk. My studio is in Walthamstow, and I walked around the North Circular Road and found horrendous graffiti and it inspired me

to make this pot which is a kind of homage to where my studio is really.”<sup>3</sup>

As shown in this episode, Perry includes this obscene graffiti drawn on the wall by the side of playing (fighting) girls depicted on the pot. A condom thrown away on the ground in the front intensifies a dreary atmosphere of the suburbs. All towns in the suburbs including Walthamstow are not as rough and chilling in all aspects as the town described on this pot. In fact, what appears on the surface might be ordinary, peaceful daily life that we can find everywhere. What Perry is trying to communicate here is a message that even in an ordinary town in the suburbs or in the local people’s lives, though they appear quiet at a glance, it is likely that there are, for instance, domestic violence, bullying, alcohol dependence, reality of social disparities, and discrimination and prejudice of different kinds.

What symbolically shows such shady parts that coexist with people’s daily life are a dying tree, and a bent and warped streetlight that seem to divide the pot running from the bottom up to the top. The tree has grown winding like a pine tree, and its branch is broken pitilessly as if lightning damaged it, and what is more, on the top of the trunk is hung an object that seems to be a bicycle wheel. (Fig. 8) The streetlight is, as mentioned above, a symbol of a tragic scene. The shadow of violence associated with the existence of both nature/tree and artificiality/streetlight seems to link to the coldness shown in the innocence of children, as well as the barbarity

and uneasiness in the daily life in the suburbs that are described in this work.

### Overlapped pictures: collage

In many Perry’s works including *Plight of the Sensitive Child*, another group of images that is not related to the theme depicted there (or it is connected though no relation seems to exist at a glance) is overlapped in a collage style. They are, for instance, scenery that Perry himself photographed, his self-portrait, images copied from magazines and children’s picture books, and fragmented icons such as Madonna and Child. Dissimilation of meanings and impressions through bringing image fragments in from the outside of the context has been shown by many artists who adopted collage, including Dadaists. Perry himself had made many works adopting a collage-style method since the first stage of his activities, including the time after he started making ceramics.

In *Plight of the Sensitive Child*, the ratio of the overlapped images to the framework is higher than that in Perry’s other works. According to a certain viewing angle, about eighty percent of the surface is filled with images brought in from the outside. In this work, decorative flower patterns like wallpaper, a photo of a damaged car, a picture of Madonna and Child, and a girl’s photo are cut off from the original sources, and stuck onto the surface of the pot. Watching carefully the collage arrangement, we notice that there are two kinds of arrangement—the one is to put them

at random like floating clouds in the picture while the other kind is to arrange rectangular images so that they are connected to each other without a space. The former is Perry’s usual way of making layers, which is often seen in his other works. The latter is, however, a feature element in this work. (Fig. 9)

What is interesting in relation to this is that Perry mentioned that he had got inspiration from Sigmar Polke’s work using tea towels.<sup>4</sup> It seems that he referred to *Hand Towels* made and titled by Polke in 1994. (Fig.10) The work is made up by joining together many kinds of commercially available kitchen towels, so it is nearly readymade. The only one towel that Polke mixed in those arranged towels has a design taken from a picture of a rabbit painted by Albrecht Durer. As a result, consumer products in daily life and an image copied from the art history are arranged next to each other in this work.

In the rectangular parts of the collage style in *Plight of the Sensitive Child*, photos of a damaged car and street scenes were put in among the motifs such as wallpaper and tea towels. While dissimilation had already been caused in the collages, Perry overlapped them over the pot fully covered with his own drawings. Thus, he tries to give this work further meanings and visual multi-layered qualities.

### Meaning of the pot form

I stated that Perry adopted mostly Greek, Chinese, and Japanese classic pot forms for

his pot works. The artist owns a lot of ceramic catalogues of various countries and ages. His production style is to consult those illustrations, as he plans a work, and starts up kneading and coiling clay. It differs from the style of many contemporary ceramic artists creating vessels, in that they search their unique expressions and originality in the form itself, while Perry does not seek originality in the form. It is because Perry simply wishes that his pot works carry a form from which people can have an impression of “pot.” Perry told me in an interview as follows.

“I look at what would be the most archetypal, most classic version of anything. I don’t want to make unusual shaped pots. I make copies of shapes because they are like a frame to my paintings. I just want the frame to be invisible. Then people are not looking at the shape, they are looking at what is on the pot.”<sup>5</sup>

In the case of *Plight of the Sensitive Child*, the form with a gradually swelling body with sloping shoulders, a thin, firm neck, and a wide, level opening can be rightly regarded as a kind of the most archetypal that exceeds features in a specific region and age. In fact, the reference source concerning the form of this work by Perry is *Daughters of Edward D. Boit* by Sargent. He referred to a pair of pots drawn in the painting: one pot against which a girl in the rear is leaning, and the other drawn on the right side of the picture.<sup>6</sup> A pair of porcelain pots with underglaze blue decoration is taller than the girls, and its elegant volume stands up vertically. Compared with Perry’s *Plight of the Sensitive Child*, the swelling of its body and the size of

the opening going outwards are somehow softened. Those pots used to be owned by Edward Boit, but later, they were donated to Museum of Fine Arts, Boston as well as the painting, and exhibited beside it. According to the information on the said work in Museum of Fine Arts, Boston, the pots are 188cm high Arita ware produced during the period between the end of Edo era and the beginning of Meiji era. Perry’s work that is 101cm in height with 54cm in diameter comes under the category of large works among his ceramic works. Those pots in the picture might have prompted him to work on such a scale.

It is not confirmed whether Perry saw Sargent’s painting and the pots in Museum of Fine Arts, Boston, or he only saw them in a catalogue. Considering his usual practice of studying the form of pots in books of artworks, we incline to think that the latter might be the case. In either case, what is interesting is that the relation between girls and pots in the background in the painting is converted, in Perry’s work, into girls drawn on the pot, and sharply feeling the atmosphere and qualities that Sargent’s painting created, and Perry developed them further in his own work in a bold and skillful way.

In this text, I have tried some analyses concerning *Plight of the Sensitive Child*, tracing the artist’s words. As the artist repeated that it is more important to understand that there is a gray zone that is neither black nor white than to find black and white of things. This work is not intended to present a simple moralistic

lesson or an answer to his view of the world. The world of children unfolded in this work, while relating to various image fragments taken into the pictures and involving viewers’ mentality and senses, consequently throws a question “what is human nature?” at us. This work is a weapon though it is a pot, and aggressive though decorative. It is one of the realities though it is a fantasy, and it can become our own reality.

(translated by NISHIZAWA Miki)

#### notes

1. From Perry’s statement submitted when the museum bought the work in 2004. Sargent’s painting is currently in the collection of Museum of Fine Arts, Boston.

2. the same as note 1

3. “Grayson Perry: Collection Intervention,” Tate St. Ives, 2004

4. From Perry’s statement submitted when the museum bought the work in 2004

5. From an interview with Perry at his studio in London in November 2006

6. From Perry’s statement submitted when the museum bought the work in 2004